



背景

昭和51年（1976）9月、台風17号の停滞とその後6日間降り続いた雨により、高知市では降り始めからの総降雨量が1,306mmという記録的な豪雨となりました。市内を流れる鏡川、神田川、久万川などの川が氾濫し、市内のほとんどが水没しました。このため、高知市長は「非常事態宣言」を発表し、「自分の命は自分で守ってほしい」という報道がなされました。災害時には行政が対応できない事態が想定されます。その時には、自分の身は自分で守ることの重要性を伝えています。

アクセス 非常事態が宣言された高知市(高知城)

- JR高知駅より南西へ直線距離約1.5km
- 高知市丸ノ内
- 緯度経度 北緯33度33分39秒，東経133度31分53秒



昭和五十一年（一九七六）、高知市を台風一七号が襲った高知水害の時のことです。住んでいる地区が海拔ゼロメートル地帯であるため、私は、台風に備えて家具を二階に上げるかどうか判断しようと、夕刻、玄関先に出ました。深さが二メートル近くある側溝の水位が、見る間に玄関まで上がってきました。慌てて家具や電化製品を二階に上げ、畳を外し終わったところで、床板が浮き始めました。二階にいれば大丈夫と、落ち着きを取り戻していた矢先、テレビから高知市長の「非常事態宣言」が流れ、「鏡川の堤防が決壊したので、二階も危ないから各自逃げよ」と報じられました。「非常事態宣言」には見捨てられた思いが強く、かなりショックでした。反面、生き抜くためには自力で自分を守るしかないと思いつた瞬間でもありました。すでに玄関前の水位は腰のあたりまでできていました。暗闇の中、腰まで水に浸かりながら、避難場所へと向かいました。道は濁水で見えず、日々の記憶を頼りに、勘で進むしかありませんでした。また、周辺の深い側溝には各家の出入り口にコンクリートの蓋ふたがさされているだけだったので、落ちたら最後という恐怖感が募り、一歩ずつ、つま先で確認しながらの避難でした。避難場所まで時間にして二〇〜三〇分ぐらいの時間でしたが、ものすごく長く感じました。

